

# 敦煌資料の素材と日本文学

——阿弥陀經講經文と我が国浄土文学——

川 口 久 雄

- 1 慶滋保胤とその作品「池亭記」
- 2 源氏物語にみえる極楽の曼陀羅
- 3 敦煌における西方浄土变相
- 4 唐代詩人の浄土信仰
- 5 敦煌出土の阿陀經讀文
- 6 敦煌出土の阿弥陀經講經文（その一）
- 7 敦煌出土の阿弥陀經講經文（その二）
- 8 我が国における浄土变相
- 9 我が国における極楽曼陀羅
- 10 我が国における浄土讃仰の文学

1

我が国平安朝知識人における一つの典型的な生活像のバタ  
 ーンは慶滋保胤(934~997)の作品「池亭記」に示される

と思う。十世紀末、古代のたそがれの社会で、四十八九歳の彼は、東西二京のうつりかわり、社会の不安、人間のおろかさやと人生の無常をみつめて、六条坊門に営んだ蝸牛かたつむりの家のような小宅の模様と日常の生活に及ぶ。池の西に小堂を建てて弥陀を安置し、池の東に小閣を開いて書物を納める。役所づとめのひまひまに、手を洗い口を漱いで「西堂に参して、弥陀を念じ法華を誦み」、食事のあとには「東閣に入りて、書卷を開き古賢に逢ふ」といった生活である。

三百坪あまりの敷地ながら、林泉を築いて、そこに持仏堂と書庫とを造ると言うプランは西欧の古い大学の中庭を連想させる。例えばオクスフォードの古い大学の構内には芝生を敷きつめて、小さなチャペルとライブラリーを学園の中心に据えて静まりかえっている。われらはかかる古代末期のひと

りのインテリゲンツィアの生活のすがたの系譜をたどつてみることも、日本文学の性格や本質をたずねる一つのしごとかと思う。この池亭記も原拠をたどれば、白楽天の「池上篇」や道真の「書斎記」さては前中書王（源兼明）の「池亭記」をあげることができるし、その影響を追求すれば、源通親の「久我草堂記」や長明の「方丈記」をあげることができよう。なかなづく白氏の「池上篇」の移調されたもの、構想・文体はもちろん、生活態度もそれをうつしているように思われる。

白氏は唐帝国の上級官僚でありながら、菩提香火社という念仏結社に参加して、西方往生を欣求しつつ、一方詩神の呼び声に誘われて狂詠を続けるのであるが、保胤は内記の官にありながら、貴族文人と横川僧団の人人によびかけて、作文と仏事の結社たる勧学会の文学運動をおこし、詩を作つて「保胤集」をのこすと共に、源信の「往生要集」に呼応して、往生浄土の理論体系を実証するために「大日本往生極楽記」を著す。在家の念仏者と公職の儒家との二重生活を融合した中下級文人貴族の典型を示すが、かかる精神伝統は中国よりうつづくもの、彼は自らいう、儉約を好んで民政を安定した漢の文帝は異代の主、詩人でありながら仏法に帰依した唐の白楽天は異代の師、官僚でありながら山林を憐れた晋の七賢は異代の友だと。日本往生極楽記を撰したのも、往生要集に触発されたとはいえ、唐の伽才の「浄土論」、道説の「往

生西方浄土瑞応伝」の系統をうけ、その系列に属する往生伝の一にはかならない。

私が極東および西アジアの古代文化や宗教のすがたに興味をもつのも、一にそれらがシルクロードや南もしくは東支那海をわたつて、我が列島古代王国の知識人や民衆社会にひろくふかい影響を及ぼしてきたからにはかならない。この小論では主として西方浄土変と阿弥陀経の信仰をとりあげ、それらの系譜をたどつて我が国の文学のすがたに及びたいと思う。

## 2

あかつきしづかにねざめして おもへば涙ぞ おさへあへぬ はかなくこの世をすぐしても いつかは浄土へまいるべき（梁塵秘抄巻二、雑法文歌）

光源氏が紫上を失った一年後、悲しみの周忌を迎えたとき、彼は紫上が生前ながし僧都の指導のもとに、発願造写した曼陀羅をなつかしく思い出した、「かの心ざしおかれたる極楽のまだらなど、このたびなん供養すべき」（幻巻）——八月十五日、周忌の当日源氏は我が子夕霧をはじめ、六条院の人人一同齋食精進をして西方浄土変曼陀羅一鋪を懸けて供養したのである。紫上を失つて悲愁にくれる源氏晩年の孤絶の姿がある。貴妃を失った玄宗の悲しみよりもより華嚴な

14  
E 3a

欲明大教之由昔者周勃侯大師黃連覺道之於世却行終回三  
閻亂流一半耳爾我親友群生歸本流過安後世而不堪居  
逆害三命輪迴苦劫割刀出霜雪司有人見者刺殺  
要書是而生不若身受報事何日息不若身受報事何  
甘苦之憂夫身言出於世也石地傾危不聞樹木草木更有根  
一入門還起大矣夫世間走苦等苦而地交分之中事  
秘門故之過半於世間苦頭二苦頭若若若若若若若若若若  
以苦強實作故身與悲計先世者經過千劫又惡難令自歇  
長非人一身世世世世世世世世世世世世世世世世世世  
總非人一身世世世世世世世世世世世世世世世世世  
六總非人一身世世世世世世世世世世世世世世世世世  
一六總非人一身世世世世世世世世世世世世世世世世世  
三六總非人一身世世世世世世世世世世世世世世世世世  
在六總非人一身世世世世世世世世世世世世世世世世世  
南北無邊巧塔山到念非思過神多四者三身難聚五苦難  
天六將以身難的難入涅槃長在間世行教止令動後  
中教唯在苦難入涅槃長在間世行教止令動後  
內之言言問格種種種種種種種種種種種種種種種種種種  
司引陳臺齊司引水火合九九曲一齊與與與與與與與與與與  
變聖王到而化生也聖王到而化生也聖王到而化生也聖王到而化生也  
各須勤苦言而得萬思身世世世世世世世世世世世世世世世世世  
則能得子才出教瑞聖身四餘之味者度茶舍  
中下黨明調當將來

教坊本仏説阿彌陀經押略文  
Pelliot chinois Touen-Houang. Ms. 2122. verso.  
Département des Manuscrits. Bibliothèque Nationale. Paris.  
紙背  
ハリ  
国民図書館

悲恋の情調が、浄土への幻想と憧憬の気分が、極楽変相図の世界ととけあって展がる。それは唐絵的な中国世界をこえて、さらにはるかな西方的な世界への魅力につながる。

梁塵秘抄の歌謡もおそらく原型は「はかなくこの世をすぐしては」に作ったのであろう。現世において精進欣求すべきことを鼓吹した文句であったであろうが、民衆社会にうたわれるうちに、「はかなくこの世をすぐしても」と変容して、罪深く懈怠がちの凡愚の人間性を肯定しつつ、凡愚のわれらでも、下品下生でもいいからいつか浄土へ往生することができようかというかすかな希望をうたいあげる形に転訛したかと思われる。そこにより深い浄土往生の救済の精神が認められるのではなからうか。

源氏物語に見える極楽の曼陀羅、西方浄土変相図は、寺壁に板に布に絹に紙に、描かれ刺繍され、織り出された。その織りなされた西方変の一つの典型たる当麻の浄土曼陀羅ひとつをとりあげても、そこにこめられたすさまじいばかりの古代の人人の技術と精神の集中のすがたをみるだけでも、東アジアのひろい地域における西方浄土への憧憬の情熱のなみなみでなかったことが思われる。

## 3

敦煌画の浄土変相については先学のすぐれた研究もあり、

専門外の筆者の申すに及ばないことであるが、まだ一般人の目にとどかないこともあるので順序として概観しておきたい。敦煌画の浄土変相には色々あり、阿弥陀浄土変相のほかに薬師浄土変相や弥勒浄土変相などがある。また阿弥陀浄土変相にも観経変相を相伴ったものもあり、松本栄一博士の指摘のごとく、両者がミックスしたものも多い。厳密に單なる阿弥陀浄土変相というものを甄別することは必ずしも易しくなくて、多少とも観経的要素が添加されている。その一つのパターンをスタインの「千仏 the Thousand Buddhas」からあげてみると、図版第十・八・十一の如き、何れも阿弥陀如来を中央に観音・勢至の両脇士を左右に、天蓋をいたたく三尊形式で、空中に花花が散り楽器が飛び、天人・化女が降下し、池上に蓮花がひらき裸形の童子たちが生れ出る。鮮麗な花樹に閉繞せられる西方浄土の変相である。いまその図相の一例をアーサー・ウェイリーの詩人的な叙述を借りて引用しておく。図版第八デリー博物館所蔵の敦煌画である。

アマターバー（阿弥陀仏）とアヴァロキテーシュヴァラ（観音）・マハースツァーマブートラ（勢至）は池の蓮花の上に坐している。両脇侍の傍にそれぞれ小蓮花に坐した侍士の菩薩二軀が侍立する。阿弥陀は右手にヴィタルカ・ムードラ（覚観）の印相を結ぶ。彼の両脇に炎のかたちの寶石で飾られ彎曲した宝柱があり、紅い花さく二本の木の幹

が、花の輪の天蓋を支える。背景は大理石を以て池をここみ、その後には竹が二本はえる。上空には雲に駕して降り来る菩薩たち、裸形の童子になった靈魂たち、リボンをつんだ楽器たち——笛・ハーブ・琵琶・クラッパ（りき）そして太鼓などがまき散らされる。池の上に鴛鴦が一つがいずつ泳ぎ、蓮の蕾がふつくらと童子の靈魂たちを中に包んで水面にうかぶ。水面と同じ高さの中台の上に右から左へ五羽の鳥たちが描かれる。鸚鵡と孔雀と白鶴びやくこと共命ぐみょうと舍利しやり——この浄土に棲む禽たちにはそれぞれ銘記がある。いうまでもなくこの禽たちはアミターバ・スートラ（阿弥陀経）のなかに言及されている。蓮の蕾の中に包まれた八人の裸形童子たちに上品上生、中品下生などと銘記がついている。それらはアミターユールディヤーナ スートラ（観無量寿経）に叙べられる九品往生を示す。

下部の中央に中国風な牌板があり、両側のマツトの上に供養者たちがひざまずく。左に一人の婦人、右に二人の俗男。婦人は四世紀の婦人のように頭上で平らに結い上げた髪かみの髪。二人の男は長いベルトのついた上被とがった尾羽のある胡帽をいただく。弥陀と菩薩たちは白色で隈どりされて明るい光がほどこされる。絵の年代が早いことを示す。縦五呎三吋、横五呎六吋。<sup>(3)</sup>

このような敦煌画における浄土のイメージ形成の努力の結晶

をみると、いいしれぬ浄土へのかわき、浄土への憧れの気分がくみとられよう。この鮮烈な魅惑はどこからくるのであろうか。梵本阿弥陀経すなわち「八幸あるところの美しい光景」と名づける大乘経「成立の時代と社会とが、ほど近いことを感じさせはしないであらうか。——たとえその図相の成立や製作年代が比較的後のものであったとしても。

松本博士は阿弥陀浄土変相として歴代名画記や益州名画録・寺塔記その他を引いて、「西方変」もしくは「西方変相」が両都その他の寺壁の莊嚴として異道士その他の名手が描いたことを指摘され、前掲のデリー所蔵絹本着色阿弥陀浄土変相のほかに、千仏洞における壁画の四例を図版として掲げられる。しかし西方変相は松本博士の指摘のごとくなお多く存在したので、同氏の名著刊行後五年を経た一九四二年より四三年にわたり敦煌に滞在して壁画を調査研究した謝稚柳氏の「敦煌藝術叙録」（一九五五年刊）によると西方浄土変、阿弥陀浄土変として報告されるもの、

千仏洞 第4窟北壁（以下「4北」の如くしるす）

7 南・10 南・12 南・13 南・16 東・29 南・35 南・52 南・132 南・156 北・157 北・173 南・292 南・同北・300 北

榆林窟 第2窟北壁・4 南・6 北・10 北・17 南・23 北・25

西・27 北

などがあげられ、その他単に浄土変としるされるものや明ら

かに觀經變相とみらるべきものは数多く存する。すなわち西方浄土變を壁の中央に描き、その左右に十六觀および未生怨を描くところの觀經變形式はすこぶる多く、それらは、

### 南壁

十六觀	壁東
西方浄土變	壁中央
未生怨	壁西

もしくは

### 北壁

未生怨	壁東
西方浄土變	壁中央
十六觀	壁西

の如き配置で描かれることが比較的目立つ。これは正しく敦煌<sup>トウカウ</sup>壁画觀經變とコレスポンドするもの。さらに西方變のわきに仏伝が描かれることもあり、一洞のうち壁面を異にして法華經變と相對することも多く、弥勒經變・藥師瑠璃經變と相對する場合も多い。しかし阿彌陀浄土變が必ずしも西壁に描かれるとは限らないが、これら西方浄土變・弥勒浄土變・藥師浄土變が競い描かれることは、法隆寺金堂壁画の問題に參考となりうるかもしれない。

## 4

我が国のうつほ物語に波斯国に漂流した俊蔭が西方に楽園を求めて旅する構想があるが、一般に西方に理想郷を求める

考えは原始民族に共通するといわれる。阿彌陀仏というものを、インド西方の守護神水神ヴァルナと結びつけて考える説もあり、インドでも外来の信仰だとしてベルシャ神話などに起源を求める説もあるが、阿彌陀經の記事の中にクシャーナ王朝時代の富裕な階級の生活欲求を認めて北インド起源だという説もある<sup>(12)</sup>。何れにしろ阿彌陀經は西紀一四〇年ころ成立し、その後、北インドと西域にこの信仰が盛んになったらしい。

月氏系の仏教徒が中心となって、中国に仏教が伝来するや、二世紀後半から五世紀前半にかけて浄土三部經たる無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經の漢訳がなされる。阿彌陀經の鳩摩羅什(344~413または409)訳は四〇二年ころに成立する。浄土教は中国においては東晉の慧遠(334~416)に淵源を発し、ついで東魏の曇鸞(476~542)を経て、隋に道綽の地位を確立し阿彌陀浄土の教が成立する。善導は西方變相をみて感激して道綽の門をたたき、ついに実践的宗教としての教化活動をするが、彼は生涯に「阿彌陀經十萬餘卷を写し、浄土變相三百餘堵を画」いたといわれる。

善導と同時代人たる尉遲乙僧、ついで呉道玄らの天才絵師たちが競って浄土變相、——西方阿彌陀像変を描くのも七世紀ごろからである。前述の西陲のオアシス都市敦煌地方の浄土

変も多くこのころ以後の製法である。

我が平安初期の宮廷書庫に王維集廿卷が蔵せられ、我が知識人にはその詩を読んでいたものもあると思われるが、この盛唐官僚詩人王維（701～761）に「西方變面讃并序」がある。その浄土描写をみよう。

林は宝樹を分ち、七重に香れる城を遮り。衣は天花を捧げ、六時に金しける地に散れり。迦陵のとりは語らむと欲ひて、曼陀のはなは未だ落ちず。衆の善は普く会して、諸の相そ具かに美しき。

また「西方阿弥陀變并序」がある。

宝樹列を成し、金砂自らに映ゆ。迦陵語らむと欲ひ、曼陀は未だ落ちず。此の中年に咲ちて、上品に登る。池蓮の宝座、将に棠棣の榮を踰えむとし、水鳥の法音、当に鵲鳩の力を悟るべし。

とある、羅什訳の阿弥陀經に拠って面贊を作っていると思われる。

源氏物語幻巻極楽曼陀羅の注に四辻善成は白居易（846～909）の面贊を引いている。文集は我が平安朝文人の帳中秘であったから、この贊文は我が国に影響したと思われる。①先ず「續西方頓讃并序」がある。女弟子蓮花性なるものが発願して故楊夫人の追善のために浄財を以て、「西方の阿弥陀如来の像及び本の国土の眷属一部」を絵絹に刺繡して供養

した時の讃序である。

夫れ銅を範どり、絵を設くることは、文を刺し繡することの精勤なるに若かず、形を想ひ号を念ふことは、相好を観つことの親近なるに若かざるなり。

とある。②次に「画西方頓記開成五年三月十五日」。六十七歳の白居易は風疾をやんだので、俸錢三万を捨てて工人杜宗に注文して、阿弥陀經と無量寿經とに拠り、西方阿弥陀浄土の世界の一部を絵絹に刺繡で縫い出させたのである。高さ九尺、幅三尺。

阿弥陀仏中央に坐る、觀音・勢至二大士左右に侍せり。天人瞻仰して眷属圍繞す。樓台の妓樂、水樹の花鳥、七宝厳しく飾り、五彩彰に施せり。爛爛煌煌として功德成就しぬ。

かくて白氏はこの功德によつて老病の苦を離れ、「南部阿彌陀の尊」を越えずして、便ち西方を觀む。白毫阿彌陀の眉の白光、念に应じて来感し、青蓮の上品に願の随、往生せむ」ことを期した。繡幀というのは「ヌヒモノセルエギヌ」と訓むべく、我が中宮寺の天寿国曼陀羅はかかる例の一断片、その完全なる大型の繡幀は大英博物館に所蔵されている。この年彼の老病が重かったとみえて、自哀自葬の意を叙した醉吟先生伝も書いたのであった。③こえて二年後、かねてより自ら造営した香山寺に、新に經藏堂を建ててその石記を作った。堂の中間に仏座を置き、座上に金色像五百軀を列ね、座後に「西方極樂世界の図一、菩薩の影二」を設け、座の周圍に二十四旋

の裝飾した文幡をかけめぐらせたとある。

こうした白居易の西方浄土の信仰は、我が王朝智識人の宗教意識を刺戟し、ひいてはその信仰生活に追隨するものが続出したのである。

## 5

観無量寿經に梵本がないので、その成立について問題があり、あるいはその成立の地がインドでなく、西域ことに于闐地方か、あるいは支那撰述かとの説があるようであるが、前述のごとく阿弥陀經は無量寿經と共に梵本があるのでインド撰述説が有力なのである。黄金の沙をしきつめ、七宝で飾られた池の描写などは当時のインドの富裕階級の生活を反映するものといわれ、そのインド的な魅力は、リズムカルな読誦の調子や漢訳による幻想世界のイメージを通してさながらに人人によびかけたかと思われる。仏国土の禽たちの啼き声や、ターラ樹の木の葉、羅網の鈴が微風にそよぐとき、天上の楽器たちが法音を宣流するという想像は、阿弥陀經への讃歌となり、説法聴聞の欲求をかきたてる。

## 阿弥陀經讃

パリ本 P. 3811

## 西方十五願讃

ロンドン本 S. 5672

西方阿弥陀仏礼文 ベキン本 乃字 六八号

西方極樂讃 ベキン本 散字 五四〇号

往生極樂讃 レニングラード本 IX-883

阿弥陀念仏讃 レニングラード本 IX-1563

阿弥陀仏所説呪 レニングラード本 IX-2554 (15)

などの讃偈が多く唱唄されたかと思う。いまその一例を引いておく、

(前略) 爰に誠を傾け深く信ずる士等有りて、此る西方像

一鋪を鑒てぬ。仰ぎて惟るに、諸公等並びに性吳江

のごとく淨くして、徳華岳のごとく高し。仁風い五郡に扇

ぎ、洪名い大邦に満てり。実に梅檀の一片と謂ひつべし。

(中略) 遂に袂を連ねて結願して、西方を写さむことを願へ

り。是に於いて遠く名公を召して、霜壁を彩る。彩毫を鄧

匠に授きて、丹素を花間に布く。毫の光は五色の暉を舒

べ、宝の地は七行の樹を列ぬ。層々たる聳閣、丹檻は花間

の霞端を払ふ。哀々たる金樓、危梁は雲際に架せり。化生

池の内、江蓮は九品の花を生じ、黄金殿の前、天楽五音の

曲を奏つ。花幢聳踊し、宝網玲瓏たり。天人三道の街に遊

び、化仏鳳凰の閑を啓く。香風動くところ、花は金国に落

つ。宝樹揺く時、声は雅音を流ふ。池中の白鶴、紫を花間

に弄る。簾際まきの頻伽、絳を葉裏に吟ぜり。韶玉簫管、鳬鳳

の音を聞くが如し、琴瑟鼓吹、雲和の曲を奏つるが似し。

百億月面に攢り、万衆星宮に捧ぐ。花間に説法の声を聞けば、風動きて梵音の響を聴く。(中略) 漸く弥陀の容を覩むひと、愍へて九花の城に到らむ。(下略)



かくて四言八句の西方詞を以て結ばれる。まことに華麗な四六駢體で、西方浄土変相を讃美している。「西方讃文」と題しながらこれは阿弥陀浄土変相造像記の役目をも果していることに注意すべきであろう。この西方讃文はさながら四六文を以て描き上げた西方変相壁面ともいうべく、羅什訳の阿弥陀浄土世界の形象が華麗な光彩と微妙なりズムでうかび上ってくる。

阿弥陀経の注釈は隋の智顗の義記や唐の窺基(632~682)の疏をはじめとして多く撰せられたが、一方窺基はまた「西方要決」を撰して西方阿弥陀像乃至これを略して一仏二菩薩のみの像を作り、六時に礼懺供養すべきことを鼓吹した。<sup>(19)</sup>かくて、浄土世界を讃頌する讃文や讃謁が統出し、一方視覚化した変相の製作が盛行し、ここに阿弥陀経の講経と浄土変の絵解きと綯い合せて、阿弥陀経の説経の文芸化がおこってくるようになるように思われる。

## 6

こうして唐社会の各地域にひろく阿弥陀経の講経、西方変の絵解きが行なわれたことが推察されるのであるが、我らはこうしたいきさつを物語る資料を敦煌から見出すことができる。敦煌本の阿弥陀経講経文とよばれる一群の写本群である。これらは広義の敦煌変文に属するものであり、周紹良な

どは阿弥陀経変文の名称を用いているが、私は王重民に従うのである。

①パリ本 P. 2931 王氏変文集 四五一―四五八頁

②ロンドン本 S. 6551 王氏変文集 四六〇―四七七頁

③パリ本 P. 2955 王氏変文集 四八〇―四八二頁

④パリ本 P. 2122 王氏変文集 四八二―四八三頁

⑤パリ本 P. 3210 王氏変文集 四八三―四八六頁

⑥ベキン本 殷字六二号 王氏変文集 四九〇―四九六頁

⑦パリ本 P. 2931 王氏変文集 四八三―四八六頁

右のうち⑥⑦以外の五種については直接原写本について調査し対校をした。⑥は雑録によって調査した。⑦は資料到首次

第調査することができよう。原典批判の上で王氏変文集に対して色々問題があるが、都合により詳説は他日を期したい。

例えば、①のはじめ、変文集下、四五―四六頁、「第一名日怖魔第二何名乞事」とあるが、これは窺基の撰した阿弥陀経通贊疏の系統をうけるもので、「一名日怖魔云々。二云乞士云々」とあり、「日怖魔」も「乞事」も誤りである。敦煌原

本についてみると曰字になっており、王氏本の誤りである。乞事は音通による原本の誤記である。また同じ王氏本四五

一頁九行の「一件袈裟掛在身」とあるが、原本は「一件袈裟身上掛」というみせけがあるのに、変文集は削除している。同じ第一行「福感招」とあるが、原本に「福感招」に作

る。第一二行「一餐」とあるが、原本に「一食」とある。原古写本の旧を存して恣に改めないことが原典批判の常道だと思ふが、この点遺憾なところが毎頁にどっさりある。王氏本を使用する時にはこの点十分の注意が必要であらう。

先ず①は首尾ともに缺佚、紙高二九糎、界高二五・五糎。

羅什所訳の経の「与大比丘衆」より「薄伽梵阿菟婁駄」に至る講經文殘卷。墨界、二八糎前後の長さの紙六丁を継ぐ。先ず経を引き、次に散文で講說解釋し、次に五言、六言、七言の白話詩でかつ叙しかつ讃する。問答体の唱導もある。窺基の経疏や通贊疏の系統に立つ解釈であるが、異文もすこぶる多い。

②は首部完全、尾部缺佚の殘卷。紙高二七・六糎。黄色の紙本長卷。根本説一切有部別解脫戒經の紙背に写す。その経をうつす紙表は天地に墨界、ただし行間無界。界高二五・三糎。王重民變文集の口絵に首部二葉を出す。「于闐国和尚阿弥陀經講經文」と題する。この講經文の語り手は西域出身の僧、唐都長安で法師となり五臺山文殊殿に修行し、中央アジアの諸靈地を巡錫したあと、さらにカラコルム山脈をこえてインドの雪鷲山に参詣しようとして于闐にきたとき病を發して西域に止まった僧で、向達や王重民は彼を「于闐的和尚」「于闐国和尚」とよぶ。本書は長卷かつ首部を完存するので敦煌地方当年講説の法則作法もよくわかる資料である。こと

に上は国王を「我が聖天可汗大迦鵬国の天王」と呼び、下は治下の諸蕃部落や遠近の州城の百姓にいたるすべての士庶男女部族によびかけるところに、当年のウイグル族の社会構成を知る一材料ともなり、また釈迦仏に帰依することを勧め

て、  
門徒弟子よ、帰依仏といっぱ何くの仏に帰依するや？

まさにこれ 摩尼の仏ならじ。

またこれ 波斯の仏ならじ。

またこれ 火妖の仏ならずして、

すなわちこれ 清浄法身、円満報身、千百億化身の釈迦

牟尼仏なるぞ！

といつて、波斯人摩尼が創めて、ウイグル族にひろがっていた摩尼教や、六朝時代北朝が信仰していた火祇教や、その他波斯教や哭神教やキリスト教の別派たる大秦教などの外道九十六種を折伏して阿弥陀経の功德を強調しているところ、当年中の社会の宗教の狀態もしることができる。重要かつ興味ある資料であるが、詳しくは言及しないでおく。

念偈、焚香、称名、それから押座文に類する七言詩のあと、導入部の散文に入る。地獄苦吟に類する地獄の惨苦をのべて聴衆を畏怖驚動させたあと、帝王より士庶男女一同懺悔して西方淨土に往生すべきことを勸化し、三婦五戒を勧め、かくていよいよ本題に入つて仏説阿弥陀経を唱経し、開題、

釈經に入るのである。韻散交錯、問答体で

問はく、「此<sup>こ</sup>る如<sup>ごと</sup>く来<sup>き</sup>い、何れの処<sup>ところ</sup>に在<sup>あ</sup>らずぞ？」

という風に講説を展開して行く。韻文は五言六言七言が交錯しており、詩中、例えば

「前生 爲<sup>い</sup>什<sup>か</sup>没<sup>め</sup>にしてか修行せざりし？」

というような、疑問代詞が「甚麼」に通ずる唐代俗語たる「爲<sup>い</sup>什<sup>か</sup>没<sup>め</sup>」のごとき白話語法で叙べられている。民衆には極めて耳近い平易な講經說法であって、変化に富んでいたことと思われる。

## 7

③唐紙一枚の残巻破片、紙高二七・二釐、紙幅三一・四釐。全部一七行の書写本。朱筆で加點、合點があり、羅什訳阿彌陀經の「復次舍利弗、彼国有種々奇妙雜色之鳥」の一段と、「白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命之鳥」の一段を掲げ、前段の唱經のあと、テキストを五に別け、

- 一 惣標羽族<sup>(22)</sup> 二 別頭禽名 三 転和雅音  
四 詮論妙法 五 聞声動念

と標示する。これは覆基の阿彌陀經疏の科文<sup>(23)</sup>に一致するものである。次に「西方仏浄土、從來九異禽」という風に五言詩八句、下平十二侵の一韻到底。次に「背黄赤白數多般、端政

殊奇顔色別」という風に七言十二句の白話詩。詩体が変わる毎に朱で合点をさす、おそらく吟調が転化するのであろう。次には六言詩も雜入する。

「上來一唱不思議 惣説西方有好鳥

向下烈其名字 不知道理如何

「都講闍梨道德高 音律清冷能宛転

好韻宮商申雅調 高著声音唱将来

——これより好鳥の名前を陳<sup>ちん</sup>ねてたもと催し、都講(法師が講經するのに相對して都講は唱經する役目である)<sup>(24)</sup>の阿闍梨の吟調をはめたたえて、声はりあげて極楽の鳥たちの名を唱えさつしやれと促す。これに催促されて次に「白鶴、孔雀……」と經のテキストが唱えられるのである。一丁の灰黄色の破片ながら、この写本は俗講の進行の模様を推察する一資料となるのである。

④ Pelliot chinois T. H. Ms. 2122 の一卷は紙高三〇・七釐、墨界。「瑜珈師地論分門記」を写す、下題に「國大徳三藏法師沙門法成述」とあり、別に「第十六卷初下至廿卷計五卷」と注す。その紙背は陰界を施し、(1)維摩押座文、(2)維摩經變文。(韻文のみ)、(3)地獄苦吟<sup>(口吟)</sup>、(4)阿彌陀經押座文、(5)阿彌陀經變文とみるべきものを連続して写し、七言白話詩一句毎に墨点で句読をさす。王重民は(3)(4)(5)を一括して「仏説阿彌陀經講經文」と擬題しているが、開題釈經を全く欠

いており、僅かの散文を除いて殆んど韻文で終始して一卷を形づくるから、(1)と(2)とを区別するに従えば(3)以下も区分せざるをえない。(4)(5)ともに韻文で阿弥陀浄土変相の場面をかつ叙述しかつ讃唄しているから普通の講経文というより俗講の時西方変を前にしての讃歎文とみたい。次にあげるところの⑤は右の(3)(4)(5)のうち(3)を欠いて(4)(5)のみ独立したもので、これだけが単独で用いられることがあったことを証する。

題して称ふ浄土 仏は弥陀

王舎城の南 竹の園の内

先づ 声聞舍利弗に告ぐ

広く 西の方 日の没る宮を演べむ

此なる 娑婆を去ること 十万強

宝閣 珠台 日月に齊し

八水 〇八功 冷々として九曲に分る

行々宝樹 〇七重 網羅 〇七重 遮る

雙々の聖鳥 玉階の傍

両々の化生 〇浄に生れたば 池の裏に坐す

白鶴 迦陵 〇四段 雅韻和らぐ

共命 頻伽 苦空を讃ふ

と歌うあたり、正しく三頁に引用したデリー蔵阿弥陀浄土変相の場面というべく、西方変を前にしての歎徳たるにちか。この次に唱経ならびに開讃の口上と展開するが、「伏願

我令聖皇帝」以下、王氏本で散文扱いにする部分も全部七言の散文体白話韻文であり、決して開題・釈経と展開しない。そのうちの極楽会の描写をみると、

二十八天 妙法を聞く

天男天女 天花を散ず

竜吟じ 鳳舞ふ 彩雲の中

琴瑟 鼓吹す 和雅の音

帝釈 前行して 宝蓋(宝を仗に作り、)を持す

梵王 後より 金炉を捧ぐ

各々無辺の眷属の俱を領して

惣べて 円成極楽の会に到る

三光四王 八部衆

日月星辰 所住の宮

雲は樓閣を擎けて 長空を下る

羅衣を掣り拽きて 米りて会に入る

華麗を極める極楽の大会の描写は、さながらに敦煌千仏堂壁画の西方阿弥陀浄土変相のイメージをうたいあげているように思われる。しかも次に浄土の宝池に蓮花の開くと共に今往生したばかりの裸形の化生童子を讃える韻文―「化生童子仏宮生」という風に「化生童子」を詩の第一句の頭に冠する七言絶句十首をつらねて終るところも、いかにも浄土往生変相を前にして讃唄する駢章形式の文句たるにふさわしい。「阿

「弥陀経変文」と呼ぶにまことにふさわしいと思われる。

⑤ 前述のごとく「頂礼無辺功德山」にはじまり、「空披荷葉作袈裟」に終る、無題号の一本であり、残巻というべきでない。

⑥ 原本未見、国立北京図書館蔵、殷字第六二号。許国霖の「敦煌雜錄」に「阿弥陀経講經文」として六行の断片を紹介する。王氏変文集の四八五頁第八行以下九行分に相当する。但し雜錄本第一行「大厨」は天厨の誤、「百味馨香□□」の欠文は「各自殊」であるごとく異文もある。前述「化生童子」の連作白話詩の四首半に当る。

⑦ は未見で内容もわからない。

以上、王氏変文集にいわたる「阿弥陀経講經文」と擬題されるところの一群の写本について略説概観したのであるが、それらの何れもが、敦煌の西方變の描写とかかわりなしとしないことがわかるであろう。また波斯・火祇・摩尼・哭神・大秦景教等の如き西方胡族の異教信仰の渦巻くなかにあって、无量寿仏国土への憧憬と魅惑が尋常のものでなかったこともわかるのである。ひろく東アジアの文化圏にその宗教的生命をもやし続け、今日も極東列島社会の民衆の精神生活の奥にその宗教的な残像を生かしつづけていること、殊に日本海域における常民の生活のなかに、今日も依然として衰え

ない精神の炎をもやしつづけている阿弥陀信仰の威力の淵源の一端にふれる思いがするようである。

ところでこれら阿弥陀経講經文は、阿弥陀経変文といつてもいいようなインド的西方的な幻想の魅惑を、言葉により文学形象化している。「極楽莊嚴と名づける大乘経」へ幸あるところの美しい光景と名づける大乘経」の行文からにじみ出てくる華麗壮大、神秘艶冶な幻想―敦煌画や我が当麻曇陀羅の阿弥陀浄土變の視覚イメージの魅惑に直ちにつながる。言葉で敷衍するところに着目すれば講經文とよぶべきかもしれないが、絵画的な幻想を展開するところに着目すれば変文とよんでいいように思われる。こうしたかかわりあいの執拗な展開こそ、民衆の心にひろく深くよびかけ、民衆から熱烈に求め讃えられた事情もわかるように思う。こうしてタクラマカン沙漠のオアシス都市に今日も埋れている信仰遺産の波動の波が、大陸・半島をつきぬけて、列島社会に伝播してきただけであった。

## 8

大陸にある広大な天然・機旦に対して、「葉つぶをまき散らしたような辺境の島国」（葉散辺土）と意識された西太平洋のわが列島社会に歴史の曙光を迎えたのは、中国の分裂時代であった。当時すでに仏教の影響は大陸社会を覆い尽し

て、中国個有の伝統文化と西方新来の外国文化との結婚混血は徐々に進行しつつあった。南北朝貴族社会が形成した貴族的仏教文化という高度なものに、われらの祖先たちは、半島経由かもしくは大陸より直接にか、いきなり触れたにちがいない。塚本善隆博士がいわれるように、それらは法華経や維摩経を重要經典とした大乘仏教であり、美術文化も雲岡や竜門の石窟にみるような仏伝・本生譚乃至は法華経變・維摩経變の造型が中心であって、浄土變の造型はまだみられず、しいていえば素朴な仏龕の阿弥陀仏の宮殿などに浄土變の一部がみられるに過ぎないという。

我が国が中国大陸の統一帝国と外交關係を結んだ推古朝の時代は、海彼では浄土教勃興期に当り、曇鸞をうけて道綽らが活躍し、やがて善導にひきつがれて初唐浄土教の時代に入る。善導の示寂は天武天皇一〇年(683)に当り、飛鳥文化の開花する時代の天武天皇と善導とはほぼ同時代人であった。この道綽らの時代に中国でも文献の上で漸く西方浄土變相が描かれはじめたようであり、善導入信の契機は、「西方變相を見て、歎じて曰く、何にしてか当に質を運すがたはものうてな、台たいに托たくし、神なまひを浄きよ土きよらのくにに棲すまましむべき」といって道綽の門をたたいたとあり、前述のようにその生涯に「弥陀經十萬卷を写し、浄土變相三百鋪を画えいたといわれる。かくて遺隋・遺唐の使節団に随行した留学僧たちは、彼の地におこりかけた浄土

教美術にふれることとなる。文献が伝えるところの長安・洛陽をはじめとする伽藍の壁面に莊嚴された西方變の浄土世界の見事さに、留学の知識人たちは瞠目し、圧倒され、青春の血を燃えたぎらせたにちがいない。天智天皇九年炎上したと史書に伝えられる法隆寺の金堂壁面の浄土變の問題は専門家にゆだねるとして、文献の上で最も早い浄土變は藥師寺講堂に見ることができ。

安置續仏像一帳、高三丈、広二丈一尺八寸、阿弥陀仏像  
井脇侍菩薩大人等、總有百餘体、奉續之。流記帳云、以  
壬辰年四月十二日、奉為飛鳥浄御原御宇天皇・藤原宮御  
宇天皇、奉造而諸坐者。(藥師寺縁起)

すなわち持統天皇六年(693)に先帝天武天皇と当代の女帝のために造られたもので、大江親通が保延六年(1136)に藥師寺に巡礼した時に実見して、

講堂(中)續曼陀羅一帳高二丈一尺八寸納(四)斯曼陀羅者衆色糸  
續阿弥陀三尊并菩薩大等百餘体。公家御願、宸勝會時、  
所奉懸也。(法隆寺所藏七大寺巡礼私記)

とする。その雄大なスケールは驚くべく、これを製作した技術と精力は言語に絶するものがある。

和銅年中、今の春日の地に造営された興福寺に、養老五年(723)弥勒浄土變が、神亀二年(725)藥師浄土變が造られた。その興福寺五重塔に「四方浄土相を安んず」(親通、七大寺

巡礼私記」とあり、興福寺縁起によれば、塔の本に、

東方 薬師浄土変

南方 釈迦仏土変

西方 阿弥陀浄土変

北方 弥勒浄土変

をそれぞれ安置したとある。<sup>(29)</sup> この配置形式と同じ方位で法隆寺金堂壁面の四壁浄土変が描かれたのだと説くのは福井利吉郎の説である。興福寺塔本西方阿弥陀浄土変は

阿弥陀仏像一軀 脇侍菩薩廿二軀四金色 種々鳥形十翼

花木四根 薄山火炉一具在花盆

を以て構成されていた立体的彫塑群像による浄土変であった。これによって考えるに、変はあえて絵画もしくは繡画のみならず、立体的な浮彫や彫塑をも含めて、全体的な造型表現に命名されたにちがいない。そして変は平安時代に入ると曼陀羅とよばれることもあったのである。「種々の鳥形十翼」は白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・共命・迦陵頻伽など西方浄土にすむ鳥たち、「花木四根」は七重行樹などをさすであろうか。阿弥陀経によって構成されたものであるとみていいであろう。

また親通の七大寺巡礼私記の元興寺五重塔の条に興福寺と同じく「四方に浄土の相を安んず」と見えている。元興寺は和銅二年(760)の造立である。「其の仏菩薩の様、不可思議

なり。峻嶒の山を疊み、曲折の路を置く、凡て言語道断なり」というのをみると写実的な須弥山形を背景としていたらしい。ここにも阿弥陀浄土変があったにちがいない。

さらに淳仁天皇天平宝字三年(769)に唐招提寺が創建され、食堂に「薬師浄土絵、阿弥陀仏像并脇侍菩薩像等」が施入安置せられ、翌四年皇太后光明子の七々斎に際し、諸国に命じて国毎に「阿弥陀浄土の画像を作り」、称讃浄土経を写さしめた。<sup>(30)</sup> 前者は薬師浄土変に対して弥陀三尊を描いた一種の西方浄土変の絵であったにちがいないし、後者は西方変像とも西方弥陀像変ともいうのと同じ阿弥陀浄土変相であったであろう。こえて同五年惠美押勝が光明皇后供養のため興福寺に東院を営んで観音を安置し、その西辺に繡補陀落浄土変、東辺に繡阿弥陀浄土変を安置した。<sup>(31)</sup>

当時帰化族の子孫の画工らをそれぞれ各地に置いて絵画のことを掌らしめていた。天智の時に「倭の画師」という姓を定め、また画部も置かれ、その他大和国のみならず山城・河内などの諸国に黄書画師・山背画師・筑紫画師・河内画師・橈画師などを置いて免税にして諸寺仏像の絵を管掌せしめたのであるから、前述各種の浄土変も彼らの手になったものもあるであろう。しかし帰化蕃別の系統に属するかかる絵師たちが西方変を描く場合は、多く中国に描かれた浄土変相を手本として模写する場合が多かったであろう。この点

で、次に説く当麻曼陀羅をも含めて、我が国の浄土変は敦煌に遺存する浄土変と比較討究すべき問題もあるであらう。

## 9

平安時代に入ると浄土変は、各種の浄土変のうち西方弥陀浄土変の描かれることが多くなると共に、それが極楽の曼陀羅とよばれるようになる。白鳳・天平期は薬師浄土変・弥勒浄土変などと相並んで弥陀浄土変が造型されたが、王朝前期円仁が不断念仏・引声弥陀経の唱誦を伝え、源信の往生要集、保胤の大日本往生極楽記の撰述などを契機として浄土教的色彩が王朝社会に色こく浸透してくる。西方浄土変という名称も、密教の金剛界・胎藏界の両界曼陀羅などの流行も反映したかして、よび名も変って「極楽の曼陀羅」とよばれるようになる。「天下の三曼陀羅」とよばれる智光曼陀羅・当麻曼陀羅・清海曼陀羅については専門の美術史家の討究にゆだねればいいが、われらはそれらが絵解され唱導に用いられたのではないかと推察して興味をもつのである。

諸寺縁起集の当麻寺の条に、

麻呂子親王造之。西堂有藕糸織浄土観無量寿经文。長一丈五尺、広一丈二尺。

また同集に引用する「極楽反字<sup>変の略</sup>曼陀羅日記」に「極楽九品宝樹之変相」とみえ、「蓮糸変相」を化人が麻呂子親王夫人

に与えたよしの伝説をしるす。<sup>よきはぎ</sup>横俣大納言息女中将姫の説話はこうして成立し、「当麻曼奈羅縁起絵」(十三世紀後半成立か)も作られ、中将姫物語はひろく我が民衆社会に語り伝えられた。<sup>(38)</sup>この曼陀羅は典型的な阿弥陀浄土変で、観経変を伴ったものであるが、実叡の「南都巡礼記」によると、后宮が建久二年南都巡礼のみぎりに当麻寺に詣り「曼陀羅ヲガマセオハシマスベキニ、日ノタダクレニクレテ、絵殿ヲバトカセヲワシマスサシテ、此寺ヲバイデサセ給テ、滝田河ノ上ヲワタラセ給」とある。この「トカセ」の意何と解すべきか、絵殿を開く意かとも思うが、「曼陀羅を解かせ」の意で、絵解にもとられなくはない。天平のころの人、中将姫にまつわる化尼織成の伝説は鎌倉期の成立といわれるが、誓願寺縁起に「この当麻の浄土の曼陀羅に化尼が出現して絵相の理<sup>ことわり</sup>を一々説き示した。中将姫や和泉式部はその絵解きに随喜した(取意)」とある。

智光曼陀羅は、南都元興寺中院極楽房が智光・頼光法師の住房で、曼陀羅太子堂があり、浄土曼陀羅を安置してあったが大破し、西行法師が勧進して修復したという。<sup>(39)</sup>従って「極楽房ノ智光ガ浄土ノ曼陀羅」<sup>(40)</sup>ともよぶ。智光は(770~781)ころに示寂した僧であるが、今昔物語集によれば智光が「弥陀ノ相好・浄土ノ莊嚴ヲ観シテ……仏、即チ右ノ手ヲ挙テ、掌ノ中ニ小サキ浄土ヲ現シ給フ」と夢にみて、さめて忽ちに



絵師を呼んで浄土の相を写さしめ、「其ノ写セル絵像ヲ係テ其ノ前ニシテ念仏ヲ唱へ講ヲ行フ事ヲ『今不絶ズ』<sup>(39)</sup>」という世間は争つてこれを模写し流伝せしめたので、曼陀羅堂においては当然絵解唱導がなされたはずである。

清海曼陀羅は平城天皇皇子真如法親王建立の大同の超昇寺の法花三昧堂にある浄土曼陀羅である。下銘に「沙門清海為奉圖絵極楽浄土并両界曼荼羅、召善女尼、令續織藕糸、功了納匝、蓮花坐現、感懷巨忘、写取彼模、令画外像<sup>カ</sup>。○緣拜者知之、于時長徳二年四月廿二日」とあるよしを諸寺縁起集はしるす。蓮糸で織成した「極楽ノ反(葵)ノ万タラ」(浄土曼陀羅)であること、またこの出現した蓮花を化人が来て外縁に写したという伝説はすこぶる当麻曼陀羅の縁起伝説にちかい説話であつて、浄土変曼陀羅が絵解きされるときに語られるにふさわしい靈驗説話といえる。

当麻曼陀羅に中将姫伝説に伴い、智光曼陀羅に智光頼光説話が伴い、清海曼陀羅に蓮糸織成蓮花写生説話が伴うことは、かかる浄土変相が絵解きされた時に、因縁譬喩の説話として語られたいきさつを物語るように私には思われる。

## 10

平安前期は主として密教が宮廷貴族の信仰を支えるから、いきおい智識階級の文学であるところの日本漢文学の世界に

は西方浄土の信仰はさほどいちじるしくはあらわれない。しかし天台系真言系密教教団の中から、漸く浄土教的傾向もめばえ育ってくるにつれて、西方浄土讃仰の投影も文学の上にあらわれてくる。

先ず道真の願文、例えば寛平八年源融の周忌法会願文の中に「弥陀仏に帰依し」嵯峨の棲籠観に新堂を造営し、「西方の一仏、勧請して本尊に備ふ」という。平安後期に続出する阿弥陀堂の様式萌芽かもしれない。阿弥陀経書写供養の記事が彼の願文の中に頻出するがそれも法華経や金光明経などの書写の一環として見えるにとどまる。無量寿仏即ち阿弥陀仏図絵造立供養も散見するが、それも弥陀一仏を専念に供養するに至らない。また往生浄土の考えや来迎摂引の思想もまれに見えるけれども、その浄土は必ずしも西方弥陀浄土でない。曼陀羅造写供養も出てくるが、それも毘盧遮那曼荼羅であつて極楽曼陀羅でない。要するに道真の願文―作品群について道真自身の信仰の中に西方浄土信仰は強く出てこないといえよう。かえつて彼の岳父たる島田忠臣の詩に、

西方<sup>さいほう</sup> 幘<sup>たけ</sup>を拝し奉る、因りて詩をもて浄土の意<sup>こころ</sup>を證へまつる。

十方浄土 尽く<sup>ことごとく</sup>に嚴莊

裏に就きて西方い九方に異なる  
見説く 国の名を極楽と為すと

承り聞く 仏の寿は無量なりと  
奇しき禽は合奏す 千般の語

宝の樹は交和す 衆妙の香

我亦阿弥陀の弟子なれば

他生には 往きて最も中央に詣らむ

これはどこの西方浄土交相幀か不明であるが、前後に台山即ち比叡に登山して詠じた作があるからあるいは東塔の三昧堂か西塔の常行堂に懸けられていたのかもしれない。何れにしても白居易の前述の續西方頓記あたりの影響になる作である。

平安中期に大学寮の学生と叡山の学侶たちが坂本に勸学会をおこしたことは前述したが、かれらのグループと共に横川の楞嚴院二十五三昧会の念仏集團も出てくる。源信の往生要集そのものが浄土讃仰の文学と見ることが出来るが、こういうグループから前述の保胤の日本往生極楽記が生れ、また具平親王の西方極楽讃も作られる。

四土二ならじ 極楽国

三身即ち一なり 阿弥陀

娑婆 彼の仏に縁有り

彼の仏 娑婆に願有り

からはじまる讃文、中の摘句、

雖十惡兮猶引摂、甚於疾風排雲霧

雖一念兮必感応、喻之巨海納涓露

は朗詠として愛誦された。

十惡トイヘドモ猶引摂ス

疾風ノ雲霧ヲ披ヨリモ甚シ

一念トイヘドモ必感応ス

之ヲ巨海ノ涓露ヲ納ニ喻フ

と朗詠九十首抄に納められ、平家物語以下の語り物で引用愛誦される。忠臣の詩が文集の記と同じ素材であるように、これは敦煌よりおびただしく出土した西方讃の作品群と同じジャンルに属する。これらを露頭として、文学精神の底流として浄土思想が大きく動いてくる、源信の影響は源氏物語の後半、ことに宇治十帖にしろくあらわれてくるし、榮花物語の文章にもそれと指摘できるようなになる。和歌にあらわれると源氏物語製作のスポンサーとの説も伝わる大斎院選子の発心和歌集や、本朝文粹の編者藤原明衡が序を書いた極楽和歌となる。発心和歌集は寛弘九年の真字序に「これ則ち十方浄土の際に、遍く往生の心を発し、九品蓮台の上に終に化生の縁を殖る所以なり」というところをみると阿弥陀浄土に限定されないが、

いろいろのはちすかかやく池水にかなふ心やすみてみゆらん

と讃えるのは極楽世界である。極楽和歌真字序で、

八功德の池の浪蒼々たり、落つる者は方に不退転に至ら

む。七重の宝林の嵐索々たり、触るる者は自ら無生忍を生ず。衆鳥讃仏の音哀和せり、誠に娑婆の春の鶯を嘲るべし。黄金瑠璃の地淨妙たり、又穢土の秋の野を奈何。……蓋し楞嚴院の往生集<sup>（往生集）</sup>の心に銘じ肝に染みたり、且つ彼の文に拠りて章句を仮り、次第に之を詠ま<sup>（よ）</sup>まくの<sup>（み）</sup>み。というように阿弥陀経に拠つて文を行っている。

末法の意識が動きはじめると上下の間に危機感と生存の不安が高まり、弥陀信仰西方往生の思想が色こくなりはじめる。貴族が阿弥陀堂を競い建てるのもこの前後からである。

道長が當んだ法成寺供養の記事は榮華物語にあって周知のごとくであるが、まことに

庭の沙、水精のやうに閃めきて、池の水清く澄みて、色々の蓮水底より生ひたり、その上にみな仏あらはれ給へり、仏の御かげは池にうつり映じ給へり、東西南北の御堂々々・経蔵・鐘樓まで影うつりて、一仏世界とみえたり。

（音楽卷）

というところは西方浄土変相を地上に現出したすがたである。道長の子頼通が宇治平等院を新造した塔供養願文とみるべきものに、

爰に弥陀如来の像を造り、極楽世界の儀を移せり。月輪を礼して手を挙ぐる者は、引接を八十種の光明に仰がむ。露地に臨みて歩を投す者は、往詣を十萬億の刹土に締めむ。

とあって、阿弥陀堂すなわち鳳凰堂は極楽世界の現出であることに言及している。また北方の王者たる藤原清衡が平泉に中尊寺を造営した時、敦光が落慶供養願文を草したなかに、

反橋一道廿二間

斜橋一道十間

竜頭御首面船二隻

左右楽器大鼓舞装束八具

右山を築きて地形を増し、池を穿ちて水脈を貯ふ。草木樹林の行を成し、宮殿樓閣の度に中れる、広楽の哥舞を奏し、大衆の仏乘を讃する、儼外の蜜餞たりとも、界内の仏土と謂ひつべし。

とある。園池伽藍の苑池に架せられた反橋・斜橋は、門や築垣と共に敦煌画の西方阿弥陀浄土変相にさながら描かれるところ、近時板橋源博士によって発掘され、金堂跡の前方に反橋・斜橋の橋脚を発見し、浄土の蓮池に天女の妓楽の舞ふ舞台が當まれていたことが明らかになった。金色堂をはじめとして東奥の地に極楽曼陀羅の世界を現出せしめたのである。

江都督匡房の願文をよむと院政期における白河の法勝寺・尊勝寺をはじめとして綺羅星の如く新造された阿弥陀堂、常行堂の輪奐の美をみると、当年の権力機構が如何に西方變の地上現出に精力を傾け、その威力を誇示しようとしたか、思ひ半ばに過ぎるものがある。

院政権や貴族階級が浄土讃仰の念を経済力にたよって誇示表出しようとしたのに対して、一般庶民たちの間に念仏往生の信仰が急速に広く深く浸透して行く。社会の危機と体制の衰弱からくる生活不安や終末的な意識は華麗な浄土を讃仰するよりも地獄の畏怖におびえ、生活の罪深さを意識させる。一方院政期に入ると、西方浄土変から極楽曼陀羅とよばれるにいたると共に、さらにそれは極楽迎接曼陀羅にうつる。匡房も亡母供養のために図絵したのは迎接曼陀羅一鋪であつた。この匡房の時代、絵巻が描かれ、往生伝や仏教説話集も編纂され続けた。説話と説話画の黄金期ともいうべき時代が展開し、来迎芸術と仏教説話文学が開花する。これらは日本美術や日本文学の一つの特質を形成しさえするという人もある。こうした時代の浄土讃仰の文学の晶化したものとして西念の極楽願往生和歌と梁塵秘抄の今様の仏歌とをあげてもいいであらうか。

イロイロノ花ヲツミテハ西方ノミダニソナヘテツユノミラクイ

にはじまり、伊呂波四十七文字を一字宛首尾に置いて、浄土往生のねがいと弥陀讃仰の熱情を懺悔の念に綯いませて真摯にうたいあげる。

浄土はあまたあんなれど、みだの浄土ぞすぐれたる、このしななんなれば、下品下生にてもありぬべし僧景

われらは何して老いぬらん、思へばいとこそあはれなれ、いまは西方ごくらくの、弥陀のちかひを念ずべし徳法文歌

貴族社会では上品上生を期していたのに対して、せめて下品下生でもという悲願、「いまは西方極楽の」と神崎の遊女とねぐら（ねぐら）が海賊にあつて殺された時臨終にうたったという悲痛な今様に古代終末期の社会の底辺の民衆のうめきがきこえる。このあたりへくると法然・親鸞の専修一向の念仏往生の信仰が、魂の救済としてはたつきはじめる前夜の精神的状況がよくうかがわれる。

このあとをうけて、別所に浄土堂・来迎堂を営む僧団、遊行勧進の念仏聖、迎講や念仏講を興行する阿弥陀の聖たちが、民衆の生活と屈折してかわりあいながら、往生浄土の信仰は深くひろがって行く。曼荼羅・縁起絵や往生要集絵の絵解き、出家往生の物語の盛行とともに極楽弥陀和讃などの和讃群、往生講式のごとき唱導文芸が一段と盛んになって行く。さらに説経節から念仏踊、融通念仏から音曲歌舞への展開のあとをたどると、どうやら中国における敦煌変文・曲子・讃文などの音曲化・芸能化が思い合はされる。

浄土讃仰の文芸は日本独自の展開を示しながら、どこかに中国西陲の俗文学の展開のフーガか、移調されたものかというような感もしてくる。浄土の信仰は中世において峠をこして生命力を失いながら、なお今日も生き続け、ことに日本海

域において力を失いきっていない。中世以後の浄土信仰とその文学の展開は当面の問題ではないからここに筆をおく。

新しい資料に触れたまま西方浄土の信仰にかかわる芸術文学というものの中央アジアより東アジアにかけてのひろいひろがり長い歴史の流れに注意してみたのである。

- (1) 本朝文粹卷十二、記類(新訂増補国史大系)本、二九八—三〇〇頁

- (2) 拙稿「方丈記の先蹤文学の一資料—成實堂本文大体系所収源通親久我草堂記—」(金沢大学法文学部論集、文学篇7、一九五九年)。築瀬一雄「方丈記」(角川文庫)二二七—二三三頁。  
(3) 拙著「平安朝日本漢文学史の研究」第十七章、寛弘期漢文学とその特質。五四二—五五六頁。

- (4) 龍村謙「観当麻曼陀羅」(仏教芸術)45、特集当麻寺。昭和三五年十二月

- (5) 松本栄一「焔焔園の研究」(昭和十二年、東方文化研究所東京研究所刊)第一章、第一節阿弥陀浄土変相及観経変相、一一四頁。

- (6) Sir Aurel Stein, 'The Thousand Buddha', Ancient Buddhist Paintings from the Cave-temples of Tun-huang on the Western Frontier of China, (to the Memory of Raphael Petrucci.) recovered and described by A. Stein, with an Introductory Essay by Laurence Binyon. London Bernard Quaritch Ltd. 1921.

- (7) Plate X. Amitabha with Attendants (ch liii 001)

Plate III. Amitabha's paradise (ch lviii 0011)

Plate XI. A Paradise of Amitabha (ch xlviii 001)

Plate XXX Fragment. (ch 00216)

などがみられる。( ) のようななかの番号は同じく Stein の 'Serindia' のそれである。

- (8) vārka-mudra. 毘盧迦。摩訶心の境において尋ね求める印相。覚観(玄奘音義)。この三行後の「竹が二本」は two bamboo であるが、むしろ芭蕉の葉にちがう。

- (6) Arthur Waley, 'Paintings Recovered from Tun-huang by Sir Aurel Stein, K. C. I. E.' preserved in the Sub-Department of Oriental Prints and Drawings in the British Museum, and in the Museum of Central Asian Antiquities, Delhi. London. Printed by order of the Trustees of the British Museum and of the Government of India. 1931. Part II. CDXCIX. (ch. xlviii. 001) 'Paradise of Amitabha'. pp. 287—288.

- (10) これさえも純粹な阿弥陀浄土変ということとは出来ず、観経變の要素がミックスしている。

- (11) 大歴十一年(776)に建づられた敦煌千仏巖の睡仏洞外の「大唐西李府君修功德碑記」によれば、東方薬師變に対して西方浄土變各一鋪を描いたことが見えるが、「十二の上願、淨刹に列ね、十六の観門、其の楽土を開く」という対偶からみても、薬師琉璃光如来本願功德經の十二願に、観無量寿經の十六願を対しており、西方浄土變は観経變であることがわかる。徐松撰「西域水道記」卷三(中国边境叢書23所収)一九〇—一九二頁

参看。

- (12) 早島鏡正「浄土三部経の解説」岩波文庫「浄土三部経」下、昭和三年「一九三一—一九四頁」。

- (13) 左常侍撰御史中丞崔公夫人李氏が亡考故某官の中祥の奉<sup>おんた</sup>為に作れる西方変圖讀ならびに序である。小林太市郎「王維の生涯と芸術」(昭和十九年刊)一五七—一五八頁。

- (14) 給事中竇紹がその亡弟故驢馬都尉の追福のために孝義寺の塔に画かせた西方阿弥陀變の讀及びその序である。同前一五八頁。

- (15) 河海抄卷一五、極楽曼陀羅事に、「白氏文集云、補西方眞讀序」(旧版)に作るが、近刊の新訂本でも「補西方眞讀序」に作るのは遺憾である。正しくは「補西方眞讀序」でなければならぬ。文学古籍刊行社一九五五年刊「白氏長慶集十」六一丁・馬元調本白氏文集卷七十、十一丁。参看。傾はタウ又はテイ。枠に張った綾絹のことで帷と通用。傾は刺繡の意。

- (16) ②馬元調本文集卷七一、六丁。③同前卷七一、八丁。「香山寺新修経藏堂記」と題する。

- (17) ОПИСАНИЕ КИТАЙСКИХ РУКОПИСЕЙ ДУНЬХУАНСКОГО ФОНДА ИНСТИТУТА НАРОДОВ АЗИИ. ВЫПУСК 2. pp. 443—444. (Москва 1967).

КИТАЙСКИЕ РУКОПИСИ ИЗ ДУНЬХУАНА.  
ПАМЯТНИКИ БУДДИЙСКОЙ ИЗДАНИЕ ТЕКСТОВ  
И ПРЕДИСЛОВИЕ Л. Н. МЕНЬШИКОВА.

(Москва 1963) p. 35. ソヴィエット科学院アジア人民研究

所東方古代文献叢刊、メンシコフ博士編「影印敦煌讀文」。モスクワ東方出版社、一九六三年刊。図版三五頁。

- (18) 敦煌本に「敦煌郷信士賢者張安三父子敬造仏堂功德記」というものがある。信士張安三父子が敦煌里に仏堂兩層を新造し、四面の壁に、「各画阿弥陀如来、観音勢至」とあって、どうやら一仏二菩薩の像のみをそれぞれ描いて、西方変壁圖としたらしいように思われる。この壁面造像記は河西管内都僧録京城内外臨境供奉大德闍揭三教大法師賜紫沙門の作で、「大唐天復八年十月」の日時をしるす。天復八年は滅亡した翌年で西紀九〇八年に当る。

- (19) 仏書解説大辞典、第一卷、四一—四二頁。塚本善隆「浄土変史概説」(《仏教芸術》26、昭和三〇年九月号)三四頁参照。

- (20) 大正蔵第三七卷、一七五八。三三三頁C段。

- (21) 志村良治「甚摩の成立—中古中国語における疑問詞の系譜—」(東北大学文学部研究年報18、一九六七年)

- (22) 「族」字、原本は明瞭にかくのごとく作るに拘わらず、王氏変文集は何故か「咲(族)」として、「族」を校者の勘注としてゐる。こういう例がしばしばある。またこの科段は原本は小書分注形式である。

- (23) 大正蔵第三七卷、一七五七。三二二頁b段。

- (24) 向達「唐代俗講考」(《唐代長安与西域文明》所収、三〇二頁)

- (25) 王氏変文集このところ「日方」に作るが、原本「西方」に作る。校者の誤りである。

- (26) 塚本前掲書、三三頁。

- (27) 「新修往生伝」・「往生西方瑞応伝」

(28) 大日本仏教全書、寺誌叢書第二、諸寺縁起集所引醍醐寺所蔵本薬師寺縁起。

(29) 鶴巻刊第四。

(30) これらは、今日法隆寺五重塔心柱の四周に釈迦八相変・維摩変等の塑像群が現存しているので、以て類推することができよう。親通が法隆五重塔の条で「尺迦成道転法輪入涅槃像を安んずへ皆不可思議の造り様なり、能く能く見るべし」とのべていることと対応している。

(31) 扶桑略記抄二。

(32) 続日本紀卷二三。

(33) 扶桑略記抄二。

(34) 新撰姓氏録左京、藩別。

(35) 聖徳太子伝暦。

(36) 佐和隆研「当麻曼荼羅図について」(仏教芸術45)、白畑よし「当麻曼荼羅縁起について」・村山修一「日本の浄土信仰」(日本絵巻物全集Ⅻ)。

(37) 諸寺縁起集所引「本朝仏法初南都元興寺由来」。

(38) 前田家本、建久二年南都巡礼記。

(39) 今昔物語集卷十五、元興寺智光頼光往生語第一。日本往生極楽記・元亨釈書卷一類聚百因縁集卷七にもしるされる。南都巡礼記前田本は「極楽房ノ智光ガ浄土ノ曼陀羅ノヲコリハ<sup>人皆知之</sup>とあって省略されるが、久原本では智光が夢中に浄土に行つて頼光と問答するくだりが見えている。前田家本解説四五―四六頁参照。

(40) 菅家文章、卷一二。為三両源相公二先考大臣周忌法会願文(日

本古典文学大系本六一頁、666)

(41) 同右、卷一二。為三故尚侍家人七々日果三宿願法会願文(古典大系本六〇〇頁、632)

(42) 田氏家集、卷上(新校群書類従、第六卷 三四六頁)

(43) 朝野群載、卷一。和漢朗詠集、卷下、仏事。

(44) 国文東方仏教叢書、歌頌篇所収。

(45) 本朝小序集(改訂増補国史大系「本朝文集」二〇〇頁)

(46) 拙稿「説話より戯劇へ―敦煌変文の性格と日本文学―」(金沢大学法文学部論集、文学篇第十二卷)九一―一〇頁。

(47) 扶桑略記第二九。康平四年十月廿五日条。

(48) 中尊寺所蔵天治三年三月廿四日中尊寺供養願文。竹内理三「平安遺文」第五卷、一七八〇―一七八二頁。岩手史学会「奥

州平泉文書」(昭和三年三月、文化財調査報告第五集)。

(49) 板橋源「平泉中尊寺大金堂前第一次発掘調査報告」(昭和三年八月)。

(50) 「江都督納言願文集」卷三、為悲母四十九日。石田一良「浄土教美術―文化史学的研究序論―」(昭和三十一年一月)一四七頁。

(51) 明治三十九年京都市下京区松原通大和大路入小松町の土中より発掘せられたもの、康治元年(二二五)の作。前掲国文東方仏教叢書、歌頌篇所収。

(52) 梁塵秘抄口伝抄卷十。宝物集。十訓抄。拾遺古徳伝。